

愛知県立芸術大学創立 50 周年記念国際シンポジウム「異文化へのまなざし」 研究発表 概要と発表者プロフィール

*研究発表の会場は、いずれも愛知県立芸術大学演奏棟大演奏室 A です。
研究発表の内容が変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。

■第 1 セッション（司会：安原雅之） 2016 年 9 月 23 日（金）13:45～

マルク・バティエ（パリ＝ソルボンヌ大学教授）

“Studying Japanese Electroacoustic Music: a View from Paris（日本の電子音響音楽研究——パリからの視点）”

日本は電子音響音楽の実践を展開したアジアで最初の国である。それは 1950 年代初頭にはじまり、西洋におけるこのジャンルの重要な諸楽派と関わってきた。異文化的な見地からすると、美学的なモデルの移行はさまざまな疑問を投げかける。たとえば、作曲家の黛敏郎は、（パリ留学後）東京への帰途に際して、アジアにおける最初の電子音響音楽作品の 1 つを作曲した。パリのスタジオからの影響にもかかわらず、その音楽に日本文化が言及されているのは明白である。黛は、シェフェールの理論に依拠するのではなく、さまざまな日本文化の音響的な抜粋を操作したのである。これは、文化的な下地の概念、言い換えれば、複文化的状況に直面した際、芸術の実践が可変的であることを示している。固有の美学的、技術的、社会政治的な思想が異文化のコンテクストに直面した際に起こる大きな問題は、「電子音響音楽研究アジア・ネットワーク（EMSAN）」のデータベースにもとづいて研究することが可能である。一方でそれは、この多様な文化にまたがった流れの特殊な支流のなかで影響関係にあるすべての人々の思想的な土台に対して、光を当てるものである。

EMSAN は、東アジアの国々と西洋とを結びつけるものである。この点で、それは懸け橋として機能しているのである。皆さんには、この懸け橋の上に立ち、音楽の流れを見つめていただきたい

マルク・バティエ Marc Battier

作曲家、パリ＝ソルボンヌ大学音楽学教授（電子音響音楽、楽器学）、電子音響音楽の DeTao Master（北京）。

作曲した電子音響音楽やミクスト・ミュージックは、ヨーロッパ、中国、台湾、アメリカ、カナダの多くの国で演奏されている。オーケストラのための作品 *Rain Water* が、2014 年に初演された。

これまでに、ジョン・ケージ、フランソワ・ペイル、カールハインツ・シュトックハウゼン、湯浅譲二の音楽アシスタントを務め、GRM（ピエール・シェフェール創設）や IRCAM（ピエール・ブーレーズ創設）で仕事をした。

国際コンピューター音楽協会（ICMA）の共同創設者。電子音響音楽研究アジア・ネットワーク（EMSAN）創設者。電子音響音楽研究ネットワークの共同創設者。また、パリの音



楽博物館のために、20 世紀の電気・電子楽器のコレクションを企画した。 *Organised Sound* 誌 (Cambridge University Press) の編集委員、 *Leonardo* 誌 (The MIT Press) の名誉編集委員。音楽学研究所会員。

井上さつき (愛知県立芸術大学音楽学コース教授)

「日本のヴァイオリン王 鈴木政吉」

名古屋の鈴木ヴァイオリンを創始した鈴木政吉 (1859-1944) は、独学で製作技術を身につけ、1893 年のシカゴ・コロンブス万博や 1900 年のパリ万博の楽器部門で入賞。分業制による楽器の工場生産をいち早く実現した。1920 年代以降、政吉は三男のヴァイオリニスト、鎮一 (しんいち) (1898-1998、スズキメソード創始者) がドイツから持ち帰ったイタリアの古銘器ガールネリを手本に、高級手工ヴァイオリンを作るようになり、その楽器は国内外で高く評価された。本発表では鈴木政吉の生涯をたどりながら、彼が日本の近代音楽史に果たした役割を探る。

この後の特別コンサートでは、本学所蔵の鈴木政吉作、1929 年製高級手工ヴァイオリンを使用した演奏が行われる

井上さつき (いのうえ さつき)

愛知県立芸術大学芸術創造センター長、音楽学部教授。

東京藝術大学大学院修了。論文博士。パリ＝ソルボンヌ大学修士課程修了。近代フランス音楽史と日本近代の洋楽器受容史を研究している。

さまざまな FM 音楽番組の構成をてがけ、特に、NHK「あさのバロック」の構成は 10 年以上担当した。クラシック番組の解説者としての出演も多数。

主な著書に『パリ万博音楽案内』(1998)、『音楽を展示する——パリ万博 1855-1900』(2009)、『フランス音楽史』(今谷和徳氏と共著、2010)、『日本のヴァイオリン王——鈴木政吉の生涯と幻の名器』(2014)。訳書にアービー・オレンシュタイン『ラヴェル——生涯と作品』(2006) など。



■第 2 セッション (司会 : 井上さつき) 2016 年 9 月 24 日 (土) 10:00~

蔡宗徳 (台南芸術大学教授)

“Transculture and Identity: Historical and Social Environment of Chinese Indonesian *Wayang Potehi* (トランスカルチャーとアイデンティティ——中国＝インドネシアのワヤン・ポテヒの歴史的・社会的環境)”

中国人移民によってインドネシアにもたらされた中国南部の伝統的な指人形劇、ワヤン・ポテヒ *wayang potehi* は、社会・文化的構造の変化に直面しているに違いない。それは、その社会・文化的構造がインドネシアにおけるワヤン・ポテヒの文化的位置と上演形態に影

響を与えているからである。故郷中国との文化的なつながりを保つために、中国系インドネシア人は、元来の中国文化のシステムを守ることに大きな注意を払った。スハルト政権の反中政策の圧力のもとで、中国系インドネシア人は、この伝統的な中国の人形劇を保持するための戦略的な方法を生み出すことを強いられた。インドネシアにおけるポテヒの発展を理解するために、本発表では、以下の点に焦点をあてる。すなわち、インドネシアにおけるポテヒの歴史的・社会的環境、人形師の育成、ポテヒの現代的な上演スタイル、ポテヒの背景音楽のジャンルと変化、ポテヒのアイデンティティと普及促進である

蔡宗徳 Tsung-Te Tsai

1998年、中国トルキスタンのムカム音楽の分析により、アメリカ・メリーランド大学で博士号を取得。中国文化大学および国立台湾芸術大学で教鞭をとり、現在、国立台南芸術大学民族音楽学研究所教授・所長および、台湾伝統音楽国際委員会議長を務める。これまでに、スロヴェニアのリュブリャナ大学、中国の中央音楽学校、武漢音楽学校、新疆芸術大学の客員教授を歴任。これまでに、インドネシア、イラン、ウズベキスタン、中国でフィールドワークを行ない、『音、儀式、医学——ジャワの民間療法のシステムと活動』、『インドネシアのイスラム音楽文化の伝統と現代性』、『イスラム世界の音楽文化』、『シルクロードの音楽と舞踊』といった著書を出版した。



増山賢治（愛知県立芸術大学音楽学コース教授）

「第二次世界大戦前後の日本映画から見聞する中国音楽について」

第二次世界大戦前後の日本において、中国（台湾、香港を含む）を題材・素材とした映画が制作、公開され、日本映画史の一頁を飾る存在として今日でも一定の認知度を保持している。そして、それらの多くの作品には戦前の記録映画や同時期の山口淑子（李香蘭）の一連の主演作から戦後の娯楽作品まで、中国情緒を醸し出す装置として中国音楽あるいは中国風の音楽が挿入歌やBGMとして用いられている。そうした中国を題材・素材とする映像作品を中心に、そこから看取される中国音楽の様相を〈蘇州夜曲〉等に代表される日本製の中国風歌曲（チャイナメロディ）やチャイニーズポップスの普及との関係性を視野に入れながら概観し、中国大陆・台湾・香港映画の日本への本格的な流入以前、それらのいわば「代用品」に込められた「日本人の願望としての中国情緒」は現代の日本人にとって、どのような意味合いを持つものなのかを考える。

増山賢治（ますやま けんじ）

愛知県立芸術大学音楽学部教授。研究専門分野はワールドミュージック。従来、音楽人類学の視点から中国の音楽文化の研究に従事し、『中国音楽の現在—伝統音楽から流行音楽まで』のほか中国音楽に関する論著多数。近年は現代日本の大衆芸能へと研究の重点を移し、同方面の論著には「日本の創作ミュージカルの新潮流としての2.5次元ミュージカルに関する一考察—その展開とカテゴリー形成をめぐって」など



がある。直近では、さらにそこに日本における中国音楽・芸能の受容の視点を組み込むことを試みつつ、音楽、演劇、映像を総合的にとらえることで見えてくる文化の様相を提示することを目指している。

安原雅之（愛知県立芸術大学音楽学コース教授）

「19世紀のロシアで編纂されたロシア民謡集について」

19世紀のロシアでは、数多くのロシア民謡集が編纂され、ロシア国内外で出版された。そこに含まれる民謡は、西洋の記譜法に則って記譜されており、また、それらの多くにはピアノ伴奏がつけられている。口承によって伝承されてきた民謡は、そのような楽譜を通して広く知られるようになる一方、民謡本来の性質を失うこととなった。それゆえ、そのような民謡集は音楽民族学的な民謡研究の対象とはならず、また、声楽曲として歌われることもなく、現在ではほとんど忘れられた存在となっている。

19世紀後半にロシア音楽は大きく発展するが、そのプロセスにおいてロシア民謡は非常に重要な要素のひとつであった。当時編纂された民謡集を鳥瞰することによって、当時認識されたロシア民謡の実態を整理することができると同時に、それら19世紀における国民主義的なロシア音楽が確立される過程の一面を明らかにすることができるだろう。

安原雅之（やすはら まさゆき）

東京芸術大学音楽学部卒業。同大学院修了。その後渡米し、インディアナ大学で音楽学、ロシア・ソヴィエト学、およびオルガンを、また、アメリカからソヴィエト時代末期にモスクワ大学へ留学し、ロシア語を学ぶ。アリオン賞奨励賞受賞。2001年、日露青年交流センターの小淵フェローとして、モスクワ音楽院にて研究を行なう。メリー・ボルドウィン・カレッジ（米ヴァージニア州）非常勤講師、山口大学教育学部助教授を経て、現在、愛知県立芸術大学音楽学部教授。



■第3セッション（司会：増山賢治） 2016年9月24日（土）14:45～

ロッセッラ・メネガッツォ（ミラノ大学准教授）

“150th Anniversary of Diplomatic Relations between Italy and Japan: the Role of Italian Photographers in 19th Century Japan（イタリア日本国交150周年——19世紀日本におけるイタリア人写真家の役割）”

2016年は、イタリアと日本の間に友好修好条約が締結されてから150周年にあたる。それ以来、両国間の最も重要な関係は、芸術および文化交流を常に重要視してきた。特に注目したいのは、19世紀末までに、日本における何名かのイタリア人芸術家の存在が日本の芸術教育と創作の発展に影響を与えたことである。そのうちのフォンタネージ Antonio Fontanesi（絵画）や ラグーザ Vincenzo Ragusa（彫刻）、カッペレッティ Giovanni Cappelletti

(建築)、キョッソーネ Edoardo Chiosso (印刷及びグラフィック) 達は、教育のために明治政府に招へいされたが、他方で、2人の写真家ベアト Felice Beato (1832-1909) とファルサーリ Adolfo Farsari (1841-1898) は、個人的に日本、特に当時の貿易港、横浜を選び、写真活動を行なった。ベアトとファルサーリは、日本の初期の写真技術と、独自の美学と創造性および 1860~80 年代当時、写真マーケットの中心地である横浜を拠点にすることにより、写真界に多大な影響力を与えた。

ロッセッラ・メネガッツォ Rossella Menegazzo

ミラノ国立大学文化財・環境学部、東洋美術史准教授。

国際北斎センター、ヴェネツィア大学カ・フォスカリ校を経て 2012 年より現職。博士号 (東洋学)。

日本の幕末明治の写真と浮世絵の影響関係を研究テーマとするほか、幅広くアジアの古美術、写真やデザインに関する展覧会を担当し、イタリアを中心に東洋美術を紹介する。

主な展覧会に「日本のグラフィック・デザイン ポスター100 2001-2010」(2010 年、ヴェネツィア)、「日本 美と精粹 1568-1868」

(2009 年、ミラノ) など。近年では東北芸術工科大学との映画祭をめぐる交流プログラムを実施した。

主な著書に『日本 (国際文化辞典シリーズ)』(エレクトタ社、2007 年)、*WA. The Essence of Japanese Design* (ファイドン、2014 年)。イタリアの新聞で日本と東洋文化美術について連載執筆中。



高梨光正 (愛知県立芸術大学芸術学専攻准教授)

「大正期の日本人が憧れた西洋美術」

明治維新後日本が大きく変わってゆく中、1914 年すなわち大正 3 年には東京帝国大学に「美学第二講座」として美術史講座が開設される。しかしその 4 年前に創刊された雑誌『白樺』には、すでにこの当時としては画期的な、白黒写真とともに西洋の美術作品が紹介されている。それらは単に、ロダンやセザンヌといった近代フランスの芸術家たちの紹介に留まらず、イタリア・ルネサンスの画家の写真も紹介されている。こうした中、『白樺』の同人でもあった児島喜久雄や、矢代幸雄のような世界的にも認められた優れたイタリア・ルネサンス研究者が登場する。大正期の日本人は西洋美術に何を求めていたのか。その手がかりを雑誌『白樺』から探してみたい。

高梨光正 (たかなし みつまさ)

北海道生まれ。東北大学大学院博士課程後期 3 年の課程単位取得退学。1994 年から 1998 年までフィレンツェ大学文学部留学 (1994-1995 年度イタリア政府給費留学生)。国立西洋美術館学芸課主任研究員 (絵画彫刻第 1 室長、絵画彫刻・保存修復チームリーダー) を経て、2013 年 4 月より愛知県立芸術大学美術学部准教授。専門は 15-18 世紀イタリア美術。



本田光子（愛知県立芸術大学芸術学専攻専任講師）

「海を越える〈琳派〉」

琳派は江戸時代の俵屋宗達・尾形光琳・酒井抱一の三人の絵師に代表される、装飾的な美術の系譜である。中国や西洋の美術とは異なる、日本らしい表現が今注目されている。しかし海外にある優れたコレクションが示すように、琳派は日本国内で見直されるより前に、海外から高く評価されてきた。

本発表では作品の移動とその背景を軸に、琳派をめぐる異文化間のやりとりを整理し、今後の展望を探りたい。

本田光子（ほんだ みつこ）

愛知県立芸術大学美術学部芸術学専攻講師（日本美術史）。東京藝術大学大学院美術研究科修了。博士（美術）。武蔵野美術大学非常勤講師、東京国立博物館任期付研究員等を経て2014年4月より現職。主な研究テーマは中・近世やまと絵と俵屋宗達。主要論文「俵屋宗達筆「舞楽図屏風」の制作背景」（『美術史』167冊、2009年）、「宗達筆「源氏物語 関屋・霽標図屏風」の造形手法」（『東京藝術大学美術学部論叢』7号、2011年）、「俵屋の宗達」（『美術フォーラム21 Vol.29 特集：やまと絵と琳派の交流』醍醐書房、2014年）など。

